

南九州の小京都を掘る

飫肥城下町遺跡の調査成果から

宮崎県埋蔵文化財センター

二 宮 満 夫

目次

- 一 はじめに
- 二 飫肥城下町遺跡の調査概要
- 三 城下絵図から見た発掘調査地点の土地利用の変遷
- 四 廃棄土抗から探る上級家臣の生活（江戸時代後期）
- 五 発掘調査から判明した中世以降の景観
- 六 おわりに

一 はじめに

大規模な曲輪群をもつ飢肥城を頂点に、中世の城郭や砦が数多く築かれた宮崎県日南市飢肥地区一帯は、南北朝の動乱以来、諸氏によって幾度も争奪戦が繰り返された地域である。その後、天然の要害（城下前方を取り囲む酒谷川と後背の急峻な崖）であった飢肥城には、九州制覇を目指す島津氏（豊州家）及びその一族が南日向統治の拠点として居城することになり、宮崎平野部で勢力を拡大して侵攻してきた伊東氏との間で、戦国時代を通して攻防が繰り返されることとなった。

これら攻防の歴史とは別に、飢肥城の麓には島津豊州家の統治時代から城下町の建設が始まるようであるが（注一）、豊臣秀吉との九州決戦で敗れた島津氏が撤退し、かねてより飢肥を渴望していた伊東祐兵が天正一十六年（一五八八）に暗れて入城すると、すぐに城下町の大規模な整備に乗り出している（注二）。その後、大きく発展した城下町は、廃藩置県まで伊東一四代にわたって、飢肥藩の中心地として賑わいをみせることとなった（注三）。

このような歴史的背景にあつて、平成二十二年（二〇一〇）に、飢肥三丁目地点で実施した飢肥城下町遺跡の発掘調査では、縄文時代から江戸時代、さらには近代まで連続と続く人々の営みを発見するに至り、城下町の形成以後、現在も宅地として利用されているため、発掘調査における資料の蓄積がままならなかった当該地域の歴史を紐解くための重要な成果を得る結果となった。特に島津豊州家統治下の遺構では、現在の地割にはない城内にまで続くと考えられる通

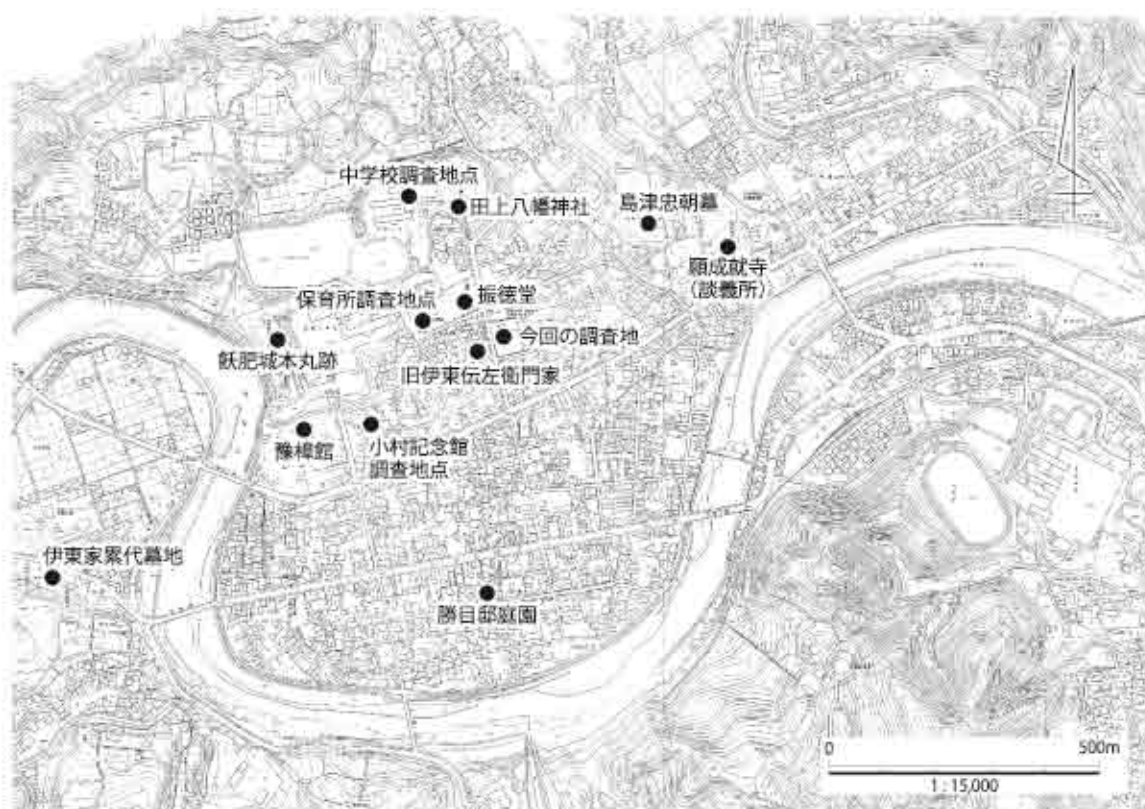


図1 今回の発掘調査地点及び飢肥城下町の周辺図（宮埋文セ2012より）



写真1 調査地点上空付近から飢肥城方面を望む(宮埋文セ2012より)

路状の遺構や伊東氏との緊張関係を知ることのできる薬研堀状の溝が検出できた。また、飢肥藩政期では上級家臣の屋敷地となった当地での武家の生活を垣間見る遺構・遺物を多量に発見することができ、当該地域における新たな歴史的知見を示すことができた。詳しい調査成果については、既刊の発掘調査報告書に譲ることにして、ここでは、中世以降における調査地点の景観を復元していきたい。

二 飢肥城下町遺跡の調査概要

飢肥城下町遺跡が所在する飢肥地区は、海岸線よりも六〇七メートル内陸に位置し、広渡川との合流点近くで、蛇行しながら東流する酒谷川の両岸地帯をいう。飢肥城とその城下町は、広渡川に合流する酒谷川が最終的に大きく凹状にうねる左岸の内に立地し、酒谷川の流れをもって東・西・南側について天然の外堀とした。今回の調査地は、大手門より東に約三五〇メートルの地点で、標高約二七メートルの河岸段丘の上の高級家臣団の屋敷地が集まる十文字地区にあたり、飢肥藩政期の武家の屋敷地ほぼ半分の範囲における調査となった。以下に調査成果の概要を記す。

所在地 日南市飢肥三丁目六番地一号(宮崎地方家庭裁判所日南支部の敷地内)

調査期間 平成二二年(二〇一〇)七月一二日～一〇月二一日

調査面積 約九五〇平方メートル

調査結果

縄文時代 遺構…集石遺構(早期)

遺物…縄文土器(早期・後期)、石器(石皿・敲き石)

弥生時代後期後半

古墳時代初頭 遺構…堅穴住居など

遺物…弥生土器、土師器

古代(中世前半) 遺物…黒色土器、輸入磁器(青磁・白磁)

中世後半 遺構…通路状遺構、薬研堀

遺物…輸入磁器(青磁・白磁・青花)、東播系須恵器、

国産陶器(常滑系・備前系・肥前系)

近世 遺構…礎石建物、枯れ池状遺構、陶磁器などの廃棄土坑、

井戸、埋め縄遺構、屋敷地の区画溝など



図2 町割り図 (宮埋文セ 2012 を改変)

近代

遺構…石造り暗渠及び付随の石組み水溜め、排水管(木造時代の裁判所に関係)

遺物…国産磁器(瀬戸美濃系など)、ガラス製品(ビンなど)、医療器具など

遺物…国産陶器(備前系・瀬戸美濃系・京信楽系・薩摩系・大堀相馬系など)、国産磁器(肥前系・瀬戸美濃系など)、輸入磁器(白磁)、土師質土器、瓦(軒丸・軒平・棧瓦・鬼瓦など)、鉄製品(短刀・包丁・鎌など)、銅製品(キセル・かんざし・匙・銭など)、ガラス製品(容器・かんざし)

三 城下絵図から見た発掘調査地点の土地利用の変遷

天正一六年(一五八八)、飢肥城に入城した伊東祐兵は、城下に家臣団を集住させるために城下町の整備に乗り出す。そして、原型となる基本の屋敷割はその後一〇年ほどで完成したとみられ、飢肥城の麓には、近世的な城下町が形成されるに至っている。

当該調査地は、田上八幡神社から南に延びる「八幡馬場」と大手門前面の東西街路「賀茂馬場」が交差する北東角に位置し(調査地点北側の東西街路は、藩校振徳堂前面を通る「常真馬場」、上級家臣屋敷地であった十文字地区内に当たる。居住していた家臣名と屋敷地の範囲については、現存する絵図、

「承応年間飢肥城下図」(日南市所蔵)

制作年代…承応年間(一六五二—一六五四)

「日州飢肥城下絵図」(都城島津邸所蔵)

制作年代…寛政二年(一七九〇)前後

「江戸時代後期飢肥城下図」(日南市所蔵)

制作年代…天保一二年(一八四一)頃

の三点によって一部知ることが可能である。ここでは、これら絵図の記載をもとに、飢肥藩政期における当該調査地の土地利用について、年代順に可能な限り追っていきたい。

「承応年間飢肥城下図」

記載家臣名…北側に「山内辰之助」、南側に「老岐分左衛門」

屋敷地の範囲…東側の屋敷地との境界は、調査区南側の「賀茂馬場」の鍵曲りから北西方向に延びる一線で表記し、北側の「常真馬場」とは、ほぼ垂直に交わっている。また、南北屋敷割については、「常真馬場」と「賀茂馬場」のほぼ中央を「常真馬場」と平行する一線で描かれており、これより東側に位置す

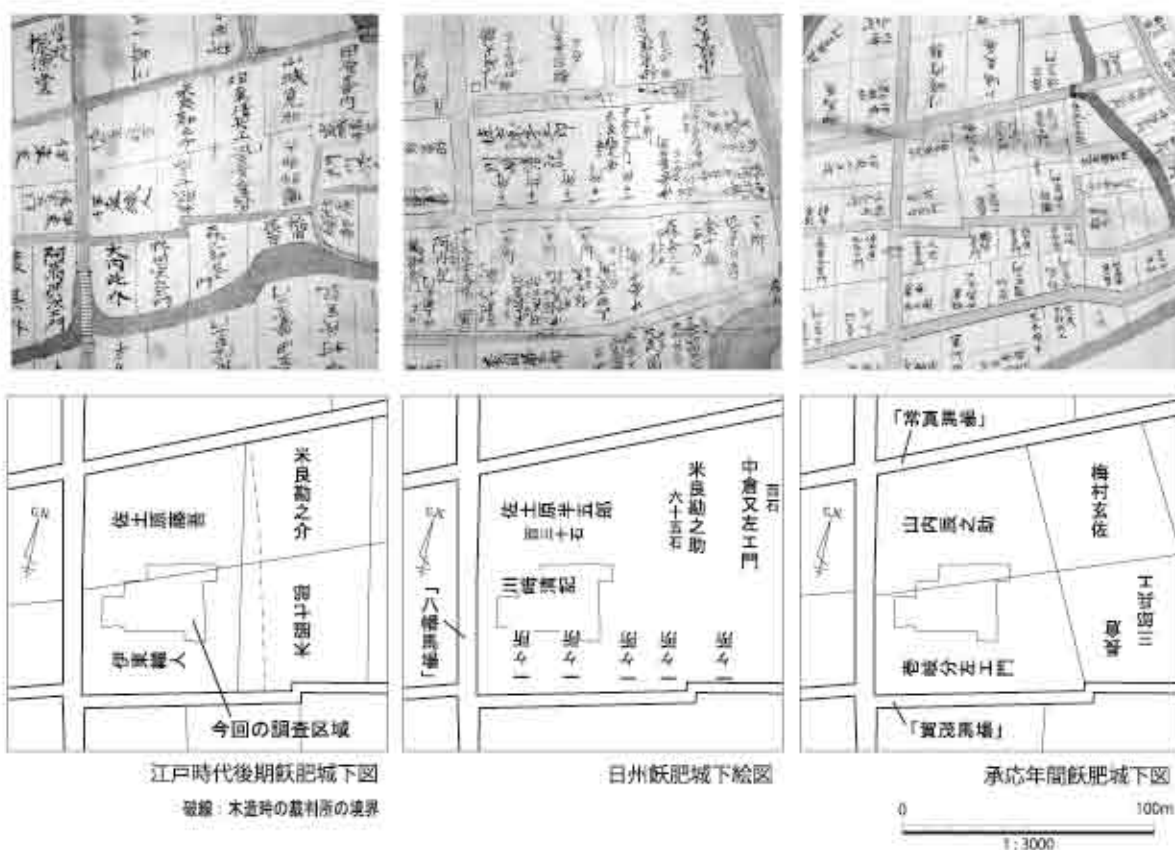


図3 各絵図における拝領地と調査地（宮埋文セ2012を改変）

る屋敷割もこの一線の延長で分かれている。玄関口に関しては、家臣名の表記方向を見ると南北街路の「八幡馬場」側にあったと思われる。

「日州肥城下絵図」※ 都城島津家が謀報活動の中で作成したと考えられているもので、一部に家臣名の誤記、道筋の誤り、角のずれなどが見受けられる。（長友禎治氏教示）
記載家臣名…西側に北から「佐土原半五郎」、「川崎清記」、「二ヶ所」が三つ

東側に北から「米良勘之助」、「二ヶ所」

屋敷地の境界についても表記されていないが、「常真馬場」と「賀茂馬場」に挟まれた同等の範囲内に七つの屋敷地が記されている。玄関口に関しては、「佐土原半五郎」と「川崎清記」の屋敷地が西側に、「米良勘之助」の屋敷地が北側にあったと考えられ、四つの「二ヶ所」（家臣名はわからないが、屋敷地が存在することを表す）については、南向きの玄関口となる。他二つの絵図との違いを見ると、当該絵図には南北に三区画の屋敷地が記載されているのに対して、その他は南北二区画のみであり、また、製作年代の近い「江戸時代後期絵図」では、当該地東方に記載された同一名の「図師助六」の屋敷地（名前は世襲されるため同一人物かどうかは不明）までに「八幡馬場」から三つの屋敷地があるだけであるが、ここでは六屋敷とかなり多い。「日州肥城下絵図」における周辺の屋敷割から見ると当該地にだけ屋敷地が密集しており、表記の違いが多い絵図であることを考えると記載ミスの可能性が高いと思われるが詳細は不明である。

「江戸時代後期肥城下図」

記載家臣名…西側に北から「佐土原藤吉」、「伊東織人」

東側に北から「米良勘之助」、「木脇七郎」

屋敷地の範囲…東西の屋敷地の境界は、八幡馬場と賀茂馬場の鍵曲りの間を西から三分二程度のところに八幡馬場

と平行する一線で表現している。また、南北の屋敷割については、承応年間図を同じく、東西両馬場間の中央付近で常真馬場とほぼ平行する一線で描かれている。玄関口に関しては、家臣名の表記方向を見ると、「佐土原藤吾」と「伊東織人」の屋敷地は、「八幡馬場」に面し、「米良勘之助」と「木脇七郎」の屋敷地はそれぞれが面する東西街路側にあつたと考えられる。

これら絵図から屋敷割に関する規制をみると、東西の屋敷境については、江戸時代前期に当たる「承応年間図」では、北側の東西街路である「常真馬場」の軸を基準にしていることに対して、「江戸時代後期絵図」では、南北街路の「八幡馬場」の軸を基準に屋敷割がなされていたことがわかる。しかし、南北の屋敷地を分ける境界は、ともに「常真馬場」と平行して描かれており、江戸時代を通して変わることはなかったことが読み取れる。

四 廃棄土坑から探る上級家臣の生活（江戸時代後期編）

集落跡の遺跡からは、生活において不要となった物を廃棄した痕跡がしばしば発見される。それは、ゴミを山積みにした貝塚のようなものや、地面を掘り窪めた穴の中にゴミを捨てる場合（廃棄土坑）など、その廃棄行為の形態は種々様々である。しかし、そのゴミが持つ多種多様な内容は、今日を生きる我々にとって、当時の人々の生活様式などを理解するための重要な情報源であり、単なる不要物に止まらない。

今回の調査地点においても、江戸時代以降、大小の廃棄土坑が形成され、また、広範囲に渡って生活雑器が散布された状況も認められた。ここでは、廃藩置県後の屋敷廃絶に伴って、生活雑器などが

一括して廃棄されたと考えられる廃棄土坑のひとつ（S二二五）を通して、当時の上級家臣の生活の一端を窺ってみたい。

主屋の北東脇に設けられた廃棄土坑は、長軸二・七メートル、短軸一・七メートルの楕円状に造られており、深さ二〇センチとやや浅めに掘削された中に、破片数にして四七一点もの国産陶磁器、金属製品、ガラス製品などの生活雑器（表一）が一括廃棄されていた。出土遺物の年代については、一九世紀前半期に属するものが大半を占め、特に瀬戸・美濃系磁器のうち、寿文の木型打込小皿や篆書文の端反小碗（口縁部分が外反する碗）など幕末期に特徴的な磁器が見受けられた。廃棄土坑の性格としては、土坑を構成する埋土が明治期の整地土であつたことなどを踏まえると、廃藩置県後の屋敷廃絶に伴うものであつたと考えてよいと思われる。そして、先の城下絵図の検討から、天保一二年（一八四一）頃制作の「江戸時代後期肥城下図」に記載された「伊東織人」の屋敷地であつた時と廃棄土坑の年代はほぼ合致する。

出土の遺物については、碗類が約六〇個と他を圧倒しており、碗類のうち約六〇個が小碗で占められている。このような小ぶりの碗は、酒・茶（注四）・湯などの飲用器として利用されていたと考えられ、肥前系や瀬戸・美濃系磁器の小碗は、五個前後の組みなっているものが大半であつた。これらは「伊東織人」の家族だけの利用とも考えられ、廃棄土坑以外から出土した同意匠のものを集めた場合でも十数個程度、さらには、ほぼ同規格の京・信楽系陶器の小碗に関しても、この土坑だけで五九個体も確認できることから、家族だけでなく饗宴など大人数による利用を想定する必要がある。

また、中碗・皿類に関しても揃いのものが多く、一組ではなく別意匠で何組もあることから、日によって、あるいは食事内容によって食器を変えるなど、食に関する作法が確立していたとも考えられる。

一方で一点のものととして、特に目を引く遺物では、瀬戸・美濃系磁器の透影をもつ香炉、大堀相馬系陶器の中碗、ガラス製の瓶類、銅



写真2 遺物の出土状況（宮埋文セ2012より）



写真3 廃棄土坑出土の遺物（宮埋文セ2012より）

製の匙など、管見によるが県内初と考えられる遺物が数点含まれており、庶民にはない上級家臣ならではの所持品であったと思われる。また、安価な修理法として江戸時代後期頃から定着していた焼継ぎで補修された磁器が調査地全体で数点ほど出土しているが、それほど気に入ったものであったのか、この廃棄土坑からは焼継ぎされた肥前系磁器の中碗と瀬戸・美濃系磁器の燗德利（注五）が一点ずつ出土していることも注目しておきたい。

次に、出土陶磁器の生産地と飢肥における流通について、若干概観しておく。廃棄土坑における全出土遺物の約四〇割を肥前系磁器が占め、次いで瀬戸・美濃系磁器が約二五割と続き、これらの磁器だけで全体の約六五割に達している。しかし、陶器については、肥前系、瀬戸・美濃系の出土はわずかで、小碗の出土量が多かった京・

の内容にも迫ることができ、一級の資料となった。出土した動物遺体の多くがタイの仲間を中心とした魚骨であり、シカなどの獣骨もあるが少なく、貝類の出土とも併せると、動物性タンパク質の摂取は、魚介類が主であったことがわかる。

香を焚き、茶を嗜み、箱庭で遊び（注六）、碁に興じ、時には饗宴を設け、優品を所持する。出土品を眺めると、当地に住まう上級家臣のなかなかにして優雅な暮らしを思い描くことができる。飢肥藩の財政が、成立当初から逼迫し続けていたにも関わらず、である。

このような上級家臣の特権的な暮らしぶりは、彼らだけに財産となる山林（立山）の所有や無税の畑地など財政的優遇がなされていたからと考えられ、安井息軒が「上級藩士は：：相応の暮らし」と述べたことと合致する歴史的事象であろう（宮崎県二〇〇〇）。

信楽系陶器が全体の約一五割となる。ただし、中瓶（酒德利）や土鍋は瀬戸・美濃系、播鉢は関西系、土瓶は薩摩系と、特定器種についてはその生産地にバラつきが少ない。このことから、特定の商品に関しては、生産地と流通の関係がある程度定まっていたのだろう。

その他、廃棄土坑からは、食用であったと考えられる動物遺体や

貝類（表二）が出土して

り、当時の上級家臣の食

表1 廃棄土坑出土の遺物一覧と数量統計

		材質	磁器				陶器								土器		瓦				金属器				石製品	器類合計	器種割合(%)	器類合計	器種割合(%)					
器類	器種	推定產地ほか	肥前系	瀬戸・美濃系	薩摩系	輸入磁器	肥前系	瀬戸・美濃系	京・信楽系	備前系	關西系	大坂・相馬系	薩摩系	陶胎胎付	不明	施釉	無釉	数瓦施釉陶器	瓦質土器	ガラス製品	瓦	鉄製品	銅製品	不明						3	2	1	2	471
碗類	小杯		25	5																										30	6.4	298	82.6	
	小碗		41	62		4	1	3	59																				170	38.1				
	中碗		25	7	10		1	3	7			1																	94	11.5				
	紅猪口		1																										1	0.2				
	唐手酒杯		16	8																									24	5.1				
	仏飯器		3																										3	0.6				
	不明碗		11	2																									13	2.8				
皿類	極小皿													1		2													3	0.6	73	16.5		
	小皿		21	19				1									10												81	10.8				
	五寸皿		13																										13	2.8				
	中皿		1																										1	0.2				
鉢類	不明皿		3					1						1																5	1.1	15	3.2	
	小鉢		6																											6	1.3			
	中鉢		1																											1	0.2			
	猪口		1																											1	0.2			
	段重		1																											1	0.2			
	漆物		1																											1	0.2			
	漆鉢											1																	1	0.2				
	香炉			1					1																				2	0.4				
不明		1																1										2	0.4					
甕類									1																				1	0.2	1	0.2		
瓶類	中瓶							2																						2	0.4	10	2.1	
	燗徳利			2																										2	0.4			
	不明		1						1									1		3										6	1.3			
水注類	小水注																	1												1	0.2	12	2.5	
	急須			1							1																				5			1.1
	土瓶												5																	5	1.1			
	水筒								1																					1	0.2			
鍋類	漆鍋																8													8	1.9	12	2.5	
	土鍋							1																						1	0.2			
	不明														2															2	0.4			
蓋類	中碗蓋		10	5	4																									19	4.0	30	8.4	
	合子蓋								1																					1	0.2			
	漆物蓋		5																											5	1.1			
	土鍋蓋							1																						1	0.2			
	土瓶蓋												2																	2	0.4			
	不明蓋			1											1															2	0.4			
瓦類	軒桮瓦																				1									1	0.2	5	1.1	
	棟瓦																				1									1	0.2			
	平瓦																				1									1	0.2			
	丸瓦																				2									2	0.4			
金属製品	包丁																						2							2	0.4	5	1.1	
	小刀																						1							1	0.2			
	匙																							1						1	0.2			
その他	鍔(寛永通寶)																							1						1	0.2	5	1.1	
	簪																			2										2	0.4			
	墓石																1														1			0.2
不明															4				2	1									2	0.4	8	1.7		
合計			187	113	14	4	2	12	70	1	2	1	7	2	10	2	20	2	3	6	6	3	2	1	2	471	100.0	471	100.0					
割合(%)			39.7	24.0	3.0	0.8	0.4	2.5	14.9	0.2	0.4	0.2	1.5	0.4	2.1	0.4	4.2	0.4	0.8	1.3	1.1	0.6	0.4	0.2	0.4	100.0								

※ 今回、遺物の数量についての統計を取るにあたり、器類・器種については、普遍性を考慮して、新宿区内藤町遺跡調査会 1992『内藤町遺跡』第Ⅱ分冊「遺物鑑」で示された「やきもの分類表」に準拠しており、鉄肥城下町遺跡の発掘調査報告書で提示したやきものの名称とは必ずしも一致していない。また、陶磁器の推定産地について、報告書刊行当時との認識の違いなどから、今回変更したものがある。以下に変更した陶磁器類について列挙する。〔番号は報告番号。肥前系→瀬戸・美濃系（133・146・147・184・188・199・203・204・205・241）、肥前系→薩摩系（191・192・209）、萩系→京・信楽系（138）、瀬戸・美濃系→京・信楽系（206）、瀬戸・美濃系→肥前系（211）、不明→肥前系（171）〕なお、大坂相馬系陶器の中碗（262）に関しては、別遺構（S128）出土として報告しているが、当廃棄土坑からも同一個体の破片が出土していることから、今回の統計に加えた。

五 発掘調査から判明した中世以降の景観

表2 廃棄土坑出土の動物遺体及び貝類一覧
(宮埋文セ2012を改変)

大分類	小分類	部位
哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨 尺骨
	イノシシ/ブタ	桡骨 中手骨/中足骨
爬虫綱	スッポン	上腕骨
硬骨魚綱	マダイ	神経頭蓋・歯骨 主上顎骨・角骨
	コショウダイ属?	歯骨・角骨
	ハダイ	前上顎骨
	クロダイ属	歯骨
	アマダイ属	方骨・角骨
		前鰓蓋骨・椎骨
	キダイ	前鰓蓋骨
	ハタ科	歯骨・前上顎骨
	カツオ	尾骨・椎骨
	ボラ科	椎骨
	カマス科	椎骨
	アジ科	椎骨
軟骨魚綱	サメ類	椎骨
斧足綱	ハマグリ	殻質
	シジミ類	殻質
腹足綱	サザエ	蓋

島津豊州家が統治していた中世後半期の遺構には、通路状遺構と薬研堀がある。通路状遺構は東西方向に延びる堀底に設けられた通路で、城内方面に向かうと考えられるものである。そして、調査地を縦横する薬研堀（検出長約二七メートル）は、通路状遺構を分断するように絶ち切って造られており、天文二三年（一五四四）に伊東氏が「おびの町」を破って島津豊州家の飢肥城に攻め入り、八幡馬場において合戦となっていたことや、幅四・五メートル、深さ一・九メートルという規模を踏まえると、防衛線として設けられた堀であったと考えられる。

飢肥藩政期の江戸時代になると、当該地は屋敷地形成のために大規模な造成がなされている。本来の地形が緩斜面地であったことから、屋敷を建てるための平坦面を造るため、調査区域の中央付近から南側を大きく削り取っており、削平が及ばなかった北部域とは約一メートルの差がある。屋敷地の中心的な建物については、西側の南北街路「八幡馬場」を挟んだ向かいの旧伊東伝左衛門家の建物配置からみても、南側の東西街路「加茂馬場」に寄せていたと思われる、調査区域では中央付



写真4 薬研堀の検出状況（宮埋文セ2012より）

近から南部域に存在したと考えられる。建物配置や規模については、裁判所の基礎などによって破壊されていたため十分に理解できなかったが、主屋に係わる施設としては、竈と考えられる石組みの施設をもつ炊事場や井戸などを発見した。

絵図では時期によって屋敷規模が変化しているが、「八幡馬場」に面する屋敷の玄関については常に西向きであったと思われる、玄関側には池状の遺構が集まり、水を張る構造になっていたことがわかったことから、枯山水様式の庭園を設けていたことがわかる。調査区域の南東側には、井戸や地下遺構などを含めた土坑群があり、明瞭な遺構は今回検出できなかったが、蔵などの建物があった可能性もある。また、主屋の北東部分は建物がない空閑地となっており、建物奥にも庭地があったと考えられる。

南北の屋敷地を区切る境については、二条の溝によって区画されている。「常真馬場」とほぼ平行する両溝は、城下絵図で見た南北の屋敷地の境界と同じもので、二条の溝の間には五メートルほどの空閑地

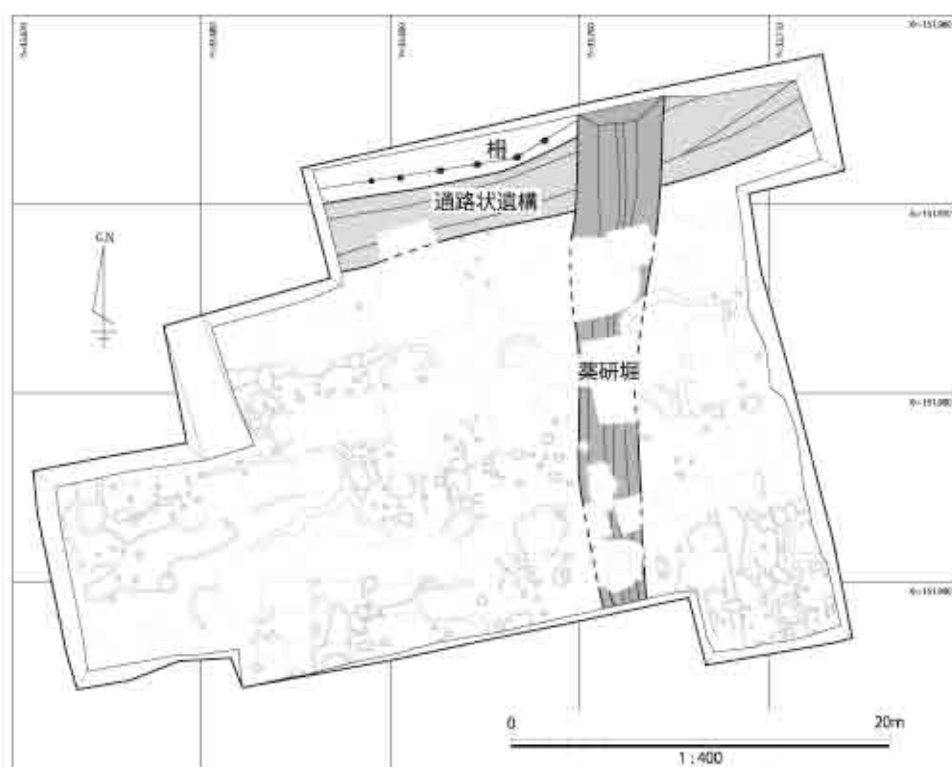


図4 島津豊州家統治下の遺構分布図（宮埋文セ2012を改変）

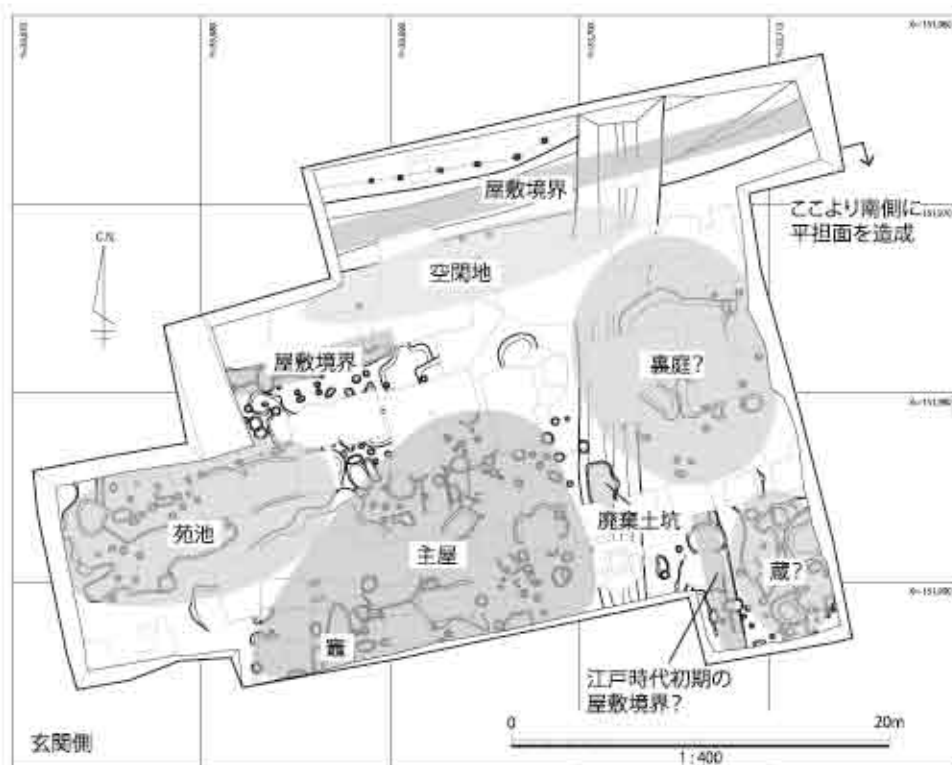


図5 近世屋敷地の空間利用概念図（宮埋文セ2012を改変）

が存在している。東側を区切る境については、明治時代に作成された地籍図を見ると、現在の裁判所敷地と同じ位置に境界線が描かれており、「江戸時代後期飢肥城下図」の東西屋敷境界と同じであったと考えられる。なお、調査区域の南西側には南北溝があり、江戸時代初期の境界溝であった可能性もあり、城下絵図には現れない屋敷境も存在していたのだろう。

出土した陶磁器類には、江戸時代を通じて碗類・皿類などに揃いの食器類が多く、また、洒落た一品も数多く見受けられることから、上級家臣の屋敷地ならではといった所であろう。

廃藩置県後は、拝領地返還のため、土族は早々のうちに離散することとなり「山之城一九七九」登記簿を見ると当地に居を構えていた伊東家も明治三二年（一八八九）には土地を手放している。その後は、当該地に医師の家系である鬼東家（登記簿上は北側の法務局側）が居住しており「吉田一九九六」、医療器具などが大量に廃棄された大型土坑や井戸などを発見した。

六 おわりに

例えば、島津豊州家が統治した中世後半期には、ある程度の城下が整っていたと考えられているが、当該調査地点は大手門から三五〇ほどの距離にあったにも関わらず、居住空間は皆無であり、城内方面への通路と防衛のための薬研堀が存在するばかりであった。しかし、大手門前面に位置する小村記念館建設に伴う調査では、当該期に属する多数の掘立柱建物群とともに、南北に延びる幅約二メートル、深さ約一メートルの溝が検出されており、江戸時代とは違う区画割りあるいは防衛線があったと推定されている「岡本一九四四」。このような状況を見ると、中世の町割りには、飢肥藩政期とはかなり違った姿であったと推定でき、その範囲についても再考の必要がある。

例えば、飢肥藩政期には、和解の時期もあるが、境界問題などで

薩摩藩との関係は悪く、両藩の交流は活発ではなかったとされる「宮崎県二〇〇〇」。しかし、陶磁器の流通に関しては、土瓶などの特定器種で薩摩系陶器が藩内を席卷しており、磁器製品についても僅かながら認められることから、経済活動の冷え込みは緩やかであったとも推測できる。

ここに一例を挙げたにすぎないが、今回の発掘調査の成果は、文献資料だけでは解明することができない飢肥地区の新しい歴史を復元するに至っている。

一方で、屋敷地を南北に分ける区画溝の発見や廃棄土坑の出土遺物から見た上級家臣の優雅な暮らしぶりなどは、絵図や文献に残された既知の歴史情報を強固に補填する形ともなった。

今回は飢肥藩の上級家臣屋敷地における調査であったが、飢肥地区における発掘調査は非常に限られており、中・下級家臣屋敷地や町屋などの様相はつかめておらず、考古学的手法を用いての城下町全体の復元はままならないのが現状ではある。しかし、今後も限られた資料を駆使しながら、さらなる新しい飢肥の歴史を顕彰していくことを自身の努めとしたい。

注

(一) 長享元年（一四八七）に日向国安国寺が唐人町に移転していること、天文一三年（一五四四）に伊東氏が「おびの町」を破って飢肥城に攻め拠っていることなどから、この頃にはある程度の城下が整っていたと考えられている。

(二) 藩政初期の島津氏との緊張関係から、主力家臣団を城下に集住させたため、急ピッチで整えられた。

(三) 石高は慶長一〇年（一六〇五）までは五万七千石余りであったが、その後二子に分地して明暦三年（一六五七）以後は五万一千八〇石余り。

(四) 江戸時代後期頃から作法としての煎茶の嗜みが流行しており「長佐古二〇〇〇」、小ぶりの碗の質や量の問題については、文化的側面も考慮しておく必要がある。

(五) 中碗の見込みには、亀が描かれており、縁起ものとして大切にしていたのかもしれない。また、爛徳利の底面には割れ目を境にして、右側に朱で「スナ□」、左側に墨で「四十八□」の記号がある。

(六) 当該廃棄土抗からではないが、同時代のものとして、城壁を模した箱庭道具が二点出土している。

参考文献

- 江戸遺跡研究会 二〇〇一 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房株式会社
- 岡本武憲 一九九四 「南日向の中世城郭―飢肥城を中心として―」 『宮崎考古』 第三号 宮崎考古学会
- 図師幸憲 一九七六 『飢肥藩先人伝』
- 長佐古真也 二〇〇〇 「日常茶飯のこと」 『江戸文化の考古学』 株式会社吉川弘文館
- 長友禎治 一九九八 「飢肥城下町」 『城下町古地図散歩? 熊本・九州の城下町』 株式会社平凡社
- 日南市教育委員会 一九九四 『飢肥城跡』 日南市埋蔵文化財調査報告書第三集
- 日南市教育委員会 一九九五 『平成六年度 日南市内遺跡発掘調査概報』 日南市埋蔵文化財調査報告書第四集
- 日南市教育委員会 二〇〇一 『平成二二年度 日南市内遺跡発掘調査概報』 日南市埋蔵文化財調査報告書第一三集
- 日南市教育委員会 二〇〇九 『平成二〇年度 日南市内遺跡発掘調査概報』 日南市埋蔵文化財調査報告書第二四集

宮崎県 二〇〇〇 「第四章 飢肥藩」 『宮崎県史 通史編 近世上』

宮崎県埋蔵文化財センター 二〇二一 『飢肥城下町遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第二二〇集

山之城民平 一九七九 『近世飢肥史稿』 山之城民平遺稿集刊行委員会

吉田常政 一九九六 『飢肥地方史余録』 有限会社鉾脈社

若山浩章 一九九四 「長谷場氏文書と長谷場氏について」 『宮崎考古』 第三号 宮崎考古学会